

## 日本と韓国における大学生による役割理論に とつづいた運動障害者のイメージ

中 司 利 一・名 川 勝

日本と韓国の大学生による運動障害者のイメージを調べるために、役割理論に基づき調査を行った。対象は日本の大学生119人と韓国の大学生90人であった。調査の結果、次のような結果が得られた。

1. 運動障害をもつ女性に対して日本の大学生がもつイメージは、母親役割に基づくものが最初であり、障害役割に基づくイメージは2番目であった。

2. 日本の大学生は障害者役割に基づくイメージを依然として強く持っていた。しかし、役割期待の内容は韓国の大学生や日本での3年前の調査結果とは異なり、社会での積極的な行動を期待するイメージとなっていた。つまりまだ適切ではないが次第に好転しつつあると言える。

キー・ワード：運動障害者 イメージ 役割理論 日本 韓国

### I. はじめに

わが国における障害児・者に対する教育・福祉は年々発展してきており、とりわけ、法律・制度などの面ではさまざまな展開がある。また建物・システムへのアクセシビリティなどの点でも整備がはかられるようになってきた。しかしながら、その基盤となる社会の人々の障害児・者への意識・態度は必ずしも適切でないところもあると言われており、考慮すべき点もあると考えられている。教育や福祉の効果的な実践およびシステムの有効な利用は社会の協力を依存するものであるから、人々の意識やイメージを明らかにする研究が今後行われていく必要がある。特に、最近では障害児・者が積極的に社会に参加したり地域の中で生活するという機運が高まりつつあるところから、社会の中における障害児・者の問題はいつそう重要な課題となってくると考えられる(Altman, 1981<sup>1)</sup>)。

さて、わが国における障害児・者に対するイ

メージの研究としては、国内における研究(伊藤・田川, 1967<sup>2)</sup>;高瀬・辻村・三澤, 1968<sup>3)</sup>)とともに、近年では比較文化的な研究も行われている(三澤, 1971<sup>7)</sup>;総理府障害者対策推進本部担当室, 1982<sup>15)</sup>;三澤・中司・川間, 1983<sup>9)</sup>, 中司, 1988<sup>10)</sup>)。三澤(1971<sup>7)</sup>)は、日本・アメリカ合衆国・イスラエルにおける一般人の意識を研究して、日本人のネガティブな態度を見いだしている。また中司(1988<sup>10)</sup>)は日本と韓国における肢体不自由児に対するイメージを比較し、韓国の大学生が主としてマイナスのイメージを形成しているのに対し、日本の大学生がプラスマイナス両方のイメージを持っていることなどを明らかにした。比較文化的研究は、調査結果を文化的に異なる他国と比べることによってわが国の特徴をより明確にする事ができるという点で有用であり、本研究においても韓国との比較研究という方法をとることにした。

ところで、イメージとは、直感的感情的な印象によって各個人に形成される考え・態度・期待・概念などであるとされ、各人の社会的行動

を規定する力が強いことから社会心理学上の重要な概念である(大山, 1973<sup>13)</sup>)。しかし他方で指し示すものがやや漠然としているので、ある観点を強調することによって特定の示唆を得ようとする試みが行われることがある。本研究で筆者らが用いた役割理論における役割期待に基づく調査方法も、そのひとつとして位置づけることができる。役割理論とは社会学に由来する概念であって、“すべて社会の成員は、それぞれの社会的地位にふさわしい行動様式に従って行為し、然るべき役割を担い、それを演じつつ日常生活を営んでいる”と考えるものである(佐藤, 1981<sup>14)</sup>)。集団や社会が成員に対して一定の役割の遵守を期待することは役割期待とよばれ、期待に同調した行為に対しては肯定的な報償が与えられるが、逆に逸脱した行為には否定的な罰則が加えられるという(Parsons, 1951<sup>12)</sup>)。役割期待に関する研究としては性役割や家族関係を対象にしたものが多いが(小山, 1967<sup>4)</sup>; 目黒, 1980<sup>6)</sup>)、障害者役割についてもわずかながら論じられている。McDaniel(1969<sup>9)</sup>)は、障害という言葉が単に不自由や社会的不利を表しているのではなく、社会における役割をも込められているとしている。またWright(1960<sup>20)</sup>)は、人々が障害者に対して“嘆きの要請(requirement of mourning)”を持っていると主張しているが、これもひとつの役割期待と考えることができよう。

障害者に対する役割期待について行われた調査研究としては、高野(1988<sup>6)</sup>)、高野・中司(1990<sup>16)</sup>)がある。彼女らは大学生を対象にして「車椅子を使用する女性」に対する役割期待を調べた。それによれば、「健常な女性」が“母親”や“主婦”“妻”の役割を期待されているのに対して、「車椅子を使用する女性」は“障害をもった人”の役割が強く期待されるが、“主婦”役割を期待されなくなってしまうという結果が得られている。本研究は高野らの行った調査を基盤として役割理論の観点から障害者のイメージを明らかにしようとしたものである。

## II. 目的

日本と韓国における障害児・者に対するイメージの違いを役割理論に基づいて検討する。特に、①他の役割と比較したときに大学生は障害者役割をどのくらい期待しているのか、②大学生の期待する障害者役割の中でも、どのような役割が強く期待されているのか、の2点を中心に、日本および韓国におけるイメージの特徴を明らかにする。さらに高野らが3年前に調査した結果と比較することによって、日本におけるイメージの最近の変化も調べる。

## III. 方法

### 1. 調査用紙

高野(1988<sup>16)</sup>)が作成した調査用紙を部分的に使用したもので、2つの調査から構成されていた。

(1) 調査1：“障害をもった人”に期待されるであろう項目を収集し、項目の妥当性を検討した後、サー斯顿等現間隔尺度構成法によって各項目に尺度値を与えた。尺度値は役割期待の強さを表しており、尺度値の低い方が役割期待がより強いことを表している。最終的に絞られた15項目は無作為に配列して調査用紙とした(資料1)。

(2) 調査2：上記調査項目から期待の強い4項目を取り出して調査2に用いた。さらに“母親”“主婦”“妻”“その他”のカテゴリーについても項目収集から同様の手続きを行い、それぞれ4項目を取り出した。このようにして得られた20項目を無作為に配列し、以下に述べる2種類の刺激を組み合わせて2枚の調査用紙とした。ひとつは、車椅子を使用している女性と子どもが描かれており、「この人は、結婚して家の外では仕事をもっていない30代半ばの女の人で、小学校3年生の子どもがいます。この女の人は、両足が不自由で立ったり、歩いたり、足を動かすことはできません。両足以外のことに関しては他の足が不自由でない女の人の人とかわりません。」の補足がつけられた(資料2および資料3左図)。もうひとつには、立っている女性と子ども

もが描かれており、「この人は、結婚して家の外では仕事をもっていない30代半ばの女の人で、小学生3年生の子どもがいます。」の補足がつけられた(資料2および資料3右図)。

なお、フェイスシートでは年齢・性別などの他に、車椅子によって生活している人について知っているかどうかを尋ねた。

## 2. 調査の実施

調査1では、“障害をもった人(車椅子にのっているが、両足以外に不自由なところはない)”について一般にふさわしいと思われる項目を5つ選択させた。調査2では、刺激の絵の女性が一般にどのような行動をとることがふさわしいと思われるかをそれぞれ5項目ずつ選択させた。

## 3. 研究対象と調査日時

研究対象は、日本の関東地方にある2つの大学の1~4年生(男62人、女57人、計119人)および韓国の3つの都市における3つの大学の1~4年生(男31人、女59人、計90人)であった。韓国での調査は、韓国語に翻訳した調査用紙を使用して、韓国の大学教官の協力によって実施された。調査日時は、日本が1990年10月、韓国が1990年6月であった(注1)。

(注1) 高野(1988<sup>16)</sup>の対象者は、調査1では402人(男166人、女236人)、調査2では362人(男142人、女220人)であった。

## IV. 結果と考察

### 1. 役割期待のカテゴリーによる分析(調査2)

以下、日本の対象群を“90日本”、韓国の対象群を“90韓国”、そして高野(1988)の行った日本の対象群を“88日本”とする。

回答者がどのカテゴリーに属した項目を多く選んでいるかについて示したのが、Fig.1a、1bである。 $\chi^2$ 検定によれば、いずれの対象群のどの刺激についてもカテゴリー間の選択数に差があることが示された(90日本における障害をもった女性については $\chi^2=40.25$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ 、障害のない女性については $\chi^2=131.98$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ 、以下同様に、90韓国は $\chi^2=30.2$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ と $\chi^2=60.76$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ 、88日本は $\chi^2=478.45$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ と $\chi^2=286.47$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ )。

ここでFig.1aとFig.1bを比較してみると気がつくのは、障害をもった女性に対する期待のもち方の違いである。つまり韓国の大学生は障害をもった女性に対してかなり強く“障害をもった人”の役割を期待しており、次に“母親”や“妻”“その他”の役割を期待している。ところが日本の大学生は、障害をもった女性に対しては一番に“母親”役割を期待しており、二番目に“障害をもった人”の役割を期待している。つまり、韓国の大学生の方が日本の大学生よりも障害を持った女性に対して強く障害者役割を期待していることになる。

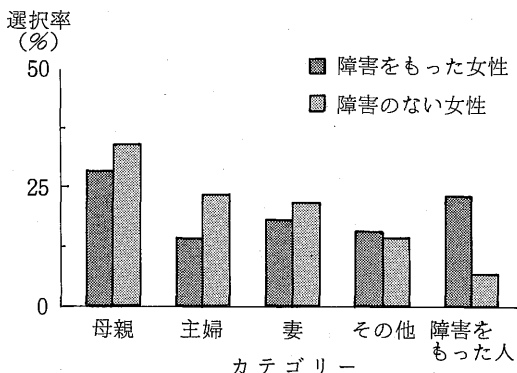


Fig.1a 調査2におけるカテゴリー別選択率 (90日本) N=119

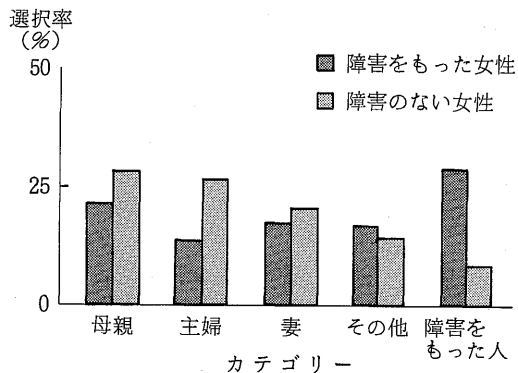


Fig.1b 調査2におけるカテゴリー別選択率 (90韓国) N=90

なお、高野(1988<sup>16)</sup>)によれば、3年前の日本の大学生もやはり障害者役割を最も多く期待しており、次に母親役割が期待される結果となっていた。韓国の大学生と似た傾向にあったと言える。

さて、母親であり、主婦や妻でもある女性が、車椅子を使用していることによって障害者の役割期待を多くもたれてしまう傾向は、Wright(1960<sup>20)</sup>)の指摘した spread 現象や三澤(1990<sup>8)</sup>)による Halo effect から生じやすいし、どのような人でもその立場や状況からそれに応じた種々の役割を期待されるのは有り得ることであるとしても、まず始めに認識されなければならないのは、彼女の女性性や母親・主婦・妻としての役割であろう。この点、現代の日本の大学生は望ましい方向に変わりつつあると言えよう。

## 2. 障害者役割期待の尺度値による分析 (調査1)

各回答者が選択した項目の平均を個人の代表値として結果を整理した。各対象群の平均尺度値および標準偏差は、90日本が1.63点 (SD=0.42)、90韓国1.79点 (SD=0.39)、88日本が1.82点 (SD=0.53) であった。個人の代表値について対象群(3)×性(2)の二要因分散分析を行ったところ、対象群の主効果が認められた ( $F=6.82, df=2/605, p<.01$ ) が、性の主効果や交互作用はなかった。また、車椅子にのって生活している人について「たいへんよく知っている」

「少し知っている」人を知識有、「知らない」と答えた人を知識無として、対象群(3)×知識差(2)の二要因分散分析を行ったところ、やはり対象群の主効果がみられたのみであった ( $F=6.66, df=2/605, p<.01$ )。そこで対象群について名義水準を5%として平均差を調べたところ、“90日本—90韓国間と90日本—88日本間に差がある”ことがわかった。すなわち、性差や知識の有無は込みにしてよい。そして、現代の日本の大学生は韓国よりも障害者役割の期待が強く、また、3年前よりも障害者役割の期待が強くなっている、とすることができる。この結果の詳細に検討するために、次節において項目分析を行う。

## 3. 障害者役割期待の項目分析 (調査1)

障害者役割の内容はさまざまである。IV2では障害者役割の期待の程度を示す尺度値をみたが、次に大学生がどの点を特に強く期待しているかを調べる。回答者が調査1においてどの項目を多く選んだかを Fig.2a、2b に示す。90日本 (Fig.2a) と90韓国 (Fig.2b) を比較すると、同じ項目が選択されていることも多いが、同一項目でも選択率を比べるとかなり異なるものがある。そこでまず両国ともに選択率の高かった項目をあげると以下のようなものである。( )の中の数字はその項目の尺度値を表す。

No.1 「市町村長の選挙は、在宅投票や不在者投票を利用して必ず行う (1.45)」

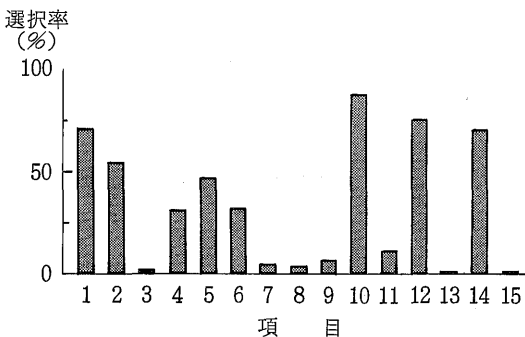


Fig.2a 調査1における項目別選択率 (90日本) N=119

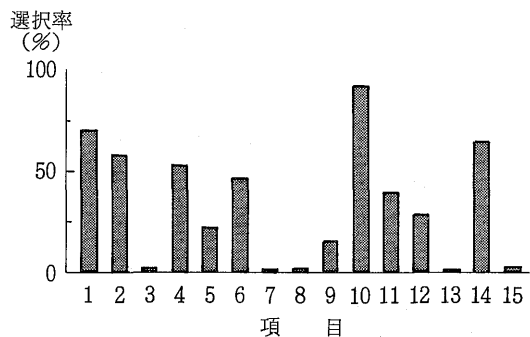


Fig.2b 調査1における項目別選択率 (90韓国) N=90

No.10 「不自由なところをもっている、他のところに何か優れたものをもっているはずだからそれを上手にいかす (0.78)」

No.14 「障害者の行うスポーツ(車椅子バスケットなど)について経験する (1.68)」

また両国の違いを表す項目として、日本・韓国ともに10%以上の選択率であり、かつ一方が他方よりも2倍以上選択されている項目を抽出すると、次のようになる。

〈日本が多い〉

No.5 「他の人にやってもらいたいことがあれば、遠慮しないでどんどん頼んでいく (2.91)」

No.12 「身体の状態を自覚し、自分の身を危険から守る (0.74)」

〈韓国が多い〉

No.4 「身体に大きい負担をかけないように自分で気を使う (1.50)」

No.11 「混んだバスや電車には、時間がなくて急いでいるときでも乗らないですむように心がける (3.31)」

両国に共通して多く選択された項目は、法的に定められている権利や、あるいは障害者についてよく知られるようになってきたことであり、どちらかといえば障害者に関連する知識的・常識的なことからである。その意味では両国とも障害者に対する適切な認識をもっていると言える。これに対して両国で選択率の異なった項目には、自己管理的な内容とともに、障害者と周りの人々との関わりについて述べた文章が含まれている。つまり韓国の学生は障害者があまり活動的であることを期待しないのに対して、日本の学生は障害者が周りの人々と積極的に関わっていくことを期待している、と考える。

中司(1988<sup>10)</sup>)は日本と韓国の大学生に対して“肢体不自由児”などをコンセプトとしてSD法を行った結果、韓国の大学生は「やや遅く、悲しいが、静かな」存在であるととらえている

のに対し、日本の大学生は「やや遅いが、強く、陽気な」存在であると考えていることを明らかにした。そして、韓国の大学生はイメージとして障害性の因子を強く持ち、肢体不自由児に古いステレオタイプな見方を抱いていると指摘している。1981年の国際障害者年および1983年からの国際障害者の10年に伴うさまざまなキャンペーンの中で、日本はわずかではあるが障害者の啓蒙が行われてきた。同時に1989年の「精神薄弱者地域生活援助事業」制度化や1991年の「身体障害者自立支援事業」開始(定藤・谷口, 1991<sup>13)</sup>)、あるいは各所でのまちづくり運動などからもわかるように、近年、障害者が社会と関わる機会は多くなってきている。これらの影響を受けて、日本の大学生は障害者に対しても積極的な期待を持つようになってきたと考えられよう。

#### まとめ

日本と韓国における大学生による運動障害者のイメージを調べるために、役割理論にもとづいて調査を行ったところ、以下のような結果が得られた。①運動障害をもつ女性に対して日本の大学生が第1に持つイメージは母親役割にもとづくものであり、障害者役割にもとづくイメージは2番目であった。②障害者役割にもとづくイメージだけをみると日本の大学生は最も強い役割期待をもっていた。しかし、その内容は韓国や日本での以前の調査と異なり、積極的に行動する役割にもとづくイメージになっていた。すなわち、日本の大学生が持つ障害者のイメージは、まだ不十分ではあるが、次第に好転しつつあると言える。

本研究は、平成2年度筑波大学学内プロジェクト助成研究の助成を受けた。

#### 文献

- 1) Altman, B. M. (1981): Studies of attitudes toward the handicapped, the need for a new direction. *Social Problems*, 28 (3), 321-337.

- 2) 石川晃弘・竹内郁郎・濱島明編 (1982) : 社会学小辞典. 有斐閣.
- 3) 伊藤隆二・田川元康 (1967) : 心身障害に対する社会人の態度 (偏見) に関する研究. 特殊教育学研究, 5, 1-13.
- 4) 小山隆 (1967) : 現代家族の役割行動 夫婦・親子の期待と現実. 培風館.
- 5) McDaniel, J. (1969) : Physical disability and human behavior. Pergamon.
- 6) 目黒依子 (1980) : 女役割. 垣内出版.
- 7) 三澤義一 (1971) : 身体障害に対する態度とその比較文化的考察. 特殊教育学研究, 9 (1), 27-33.
- 8) 三澤義一 (1990) : 障害者の心の世界と社会心理. 小島蓉子編著, 障害者福祉論, 第5章, 建帛社.
- 9) 三澤義一・中司利一・川間健之介 (1983) : 日本, 韓国及び台湾における障害児・者に対する態度に関する比較文化的研究. 筑波大学心身障害学研究, 8 (1), 81-96.
- 10) 中司利一 (1988) : 日本と韓国における大学生による肢体不自由児に対するイメージ. 特殊教育学研究, 25 (4), 29-42.
- 11) 大山正 (1973) : SD 法とイメージ測定. 東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保編, 心理用語の基礎知識, 有斐閣. 522.
- 12) Parsons, T. (1951) : The social system, Glencoe, Ill., The Free Press.
- 13) 定藤丈弘・谷口政隆編著 (1991) : 障害者のホームライフ. 朝日新聞厚生文化事業団.
- 14) 佐藤勉 (1981) : 役割理論. 基礎社会学第2巻 社会過程 第5章. 東洋経済新報社.
- 15) 総理府障害者対策推進本部担当室 (1982) : 障害者問題に関する国民の意識についての国際調査報告の概要.
- 16) 高野一葉 (1988) : 大学生による運動障害者に対する役割期待に関する研究. 昭和63年度筑波大学人間学類卒業論文.
- 17) 高野一葉 (1990) : 肢体不自由者に対する大学生の態度に関する研究—感情・認知・行動的成分の観点からとらえた実態—. 平成2年度筑波大学教育研究科修士論文.
- 18) 高野一葉・中司利一 (1990) : 大学生による運動障害者に対する役割期待に関する研究. 日本特殊教育学会第28回大会発表論文集, 358-359.
- 19) 高瀬安貞・辻村泰男・三澤義一 (1968) : 教育及び身体障害者に対する日本人の態度. 特殊教育学研究, 6 (3), 34-41.
- 20) Wright, B. (1960) : Physical Disability-A Psychological Approach. Harper & Brothers.

資料1 調査1に用いた項目

(括弧内の数字は尺度値を示す)

- (1) 市町村長の選挙は、在宅投票や不在者投票を利用してもかならず行なう (1.45)
- (2) できないことについてはよく検討された上で援助される (1.50)
- (3) 外出するよりは、家にこもって読書をしている (5.41)
- (4) 身体に大きい負担をかけないように自分で気を使う (1.50)
- (5) 他の人にやってもらいたいことがあれば、遠慮しないでどんどん頼んでいく (2.91)
- (6) 交通量の多い道路や、混雑している道路は避けて通る (2.78)
- (7) 混んでいる商店街に出かけ買物をしない (2.37)
- (8) 国や社会に一生面倒を見てもらう (5.81)
- (9) 高い山には無理して登らない (3.21)
- (10) 不自由なところをもっている、他のところに何か優れたものをもっているはずだからそれを上手にいかす (0.78)
- (11) 混んだバスや電車には、時間がなくて急いでいるときでも乗らないですむように心がける (3.31)
- (12) 身体の状態を自覚し、自分の身を危険から守る (0.74)
- (13) スポーツには危険な種目もあるから、なるべく行かない (5.12)
- (14) 障害者の行なうスポーツ(車椅子バスケットなど)について経験する (1.68)
- (15) 家庭では、人の手が十分にあるのならば自分のことでもやらなくても構わない (6.30)

資料2 調査2に用いた項目

(括弧内は各カテゴリーを示す)

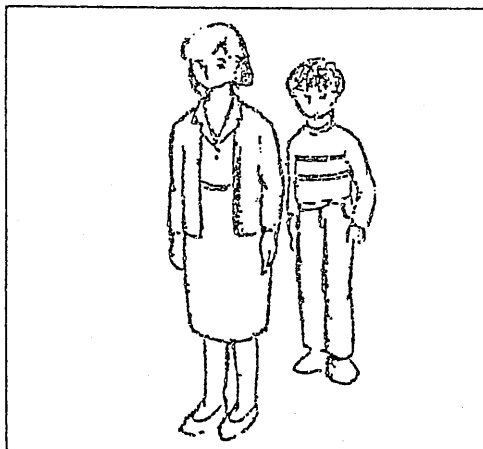
- (1) 父親とよく話し合った上で、子どもの教育方針を立てる (母親)
- (2) 夫が疲れているときにはいたわる (妻)
- (3) 子どもの病気が重いときには寝ないで看病する (母親)
- (4) できないことについてはよく検討されたうえで援助される (障害)
- (5) 家族のために台所に立って、心をこめて食事を作る (主婦)
- (6) 毎日、家の中を掃除して家族が気持ちよく生活できるようにする (主婦)
- (7) 常に他の人の迷惑にならないように、考えて行動する (その他)
- (8) 一家の家計を管理し、赤字を出さないようにする (主婦)
- (9) 夫の仕事を理解し協力する (妻)
- (10) 子どもに対していつもやさしいだけでなく、子どもが悪いことをしたときには厳しく言い聞かせる (母親)
- (11) 夫にいないところで、夫をけなすようなことは言わない (妻)
- (12) 不自由なところをもっている、他のところに何か優れたものをもっているはずだからそれを上手にいかす (障害)
- (13) 夫と話をするときは、正直に考えていることを話す (妻)
- (14) 身体の状態を自覚し、自分の身を危険から守る (障害)
- (15) 明るくふるまい、毎日を楽しみ過ごす (その他)
- (16) 友達や仲間と楽しく過ごす (その他)
- (17) 小さいよその子どもが危険な場所で遊んでいたら、すぐにやめるように注意する (その他)
- (18) 子どもを事故や病気から守る (母親)
- (19) 市町村長の選挙は、在宅投票や不在者投票を利用しても必ず行なう (障害)
- (20) 家族の人の健康に注意する (主婦)

資料3 調査2に用いた刺激図



この人は、結婚して家の外では仕事をもっていない30代半ばの女の人で、小学校3年生の子どもがあります。

この女の人は、両足が不自由で立ったり、歩いたり、足を動かすことはできません。両足以外のことに関しては、他の足が不自由でない女の人と変わりません。



この人は、結婚して家の外では仕事をもっていない30代半ばの女の人で、小学校3年生の子どもがあります。



## **College Students' Images of a Motor-Handicapped Woman in Japan and Korea : From the Viewpoint of Role Theory**

**Toshikazu NAKATSUKASA and Masaru NAGAWA**

College students' images of motor-handicapped woman were investigated from the viewpoint of role theory in Japan and Korea in 1990.

Subjects were 119 Japanese students (62 male, 57 female) and 90 Korean students (31 male, 59 female). The instruments used were a picture of a woman on a wheel chair with her child, a picture of a non-handicapped woman with her child, and scales of role behaviors of woman developed by H. Takano. The subjects were asked to select some role behaviors most suitable for a woman in the pictures. Results of the investigation of Japanese college students were compared with a similar investigation made in Japan in 1988.

Main results were as follows :

1. Japanese college students held images of a motor-handicapped woman with her child based on Mother Role at first and Handicapped Person Role at second.
2. They still held intensely the images based on Handicapped Person Role. However, the Handicapped Person Role differed in the nature from Korean college students and past Japanese college students. Japanese college students expected a motor-handicapped woman with her child to take a more active part in a society.

**Key Words :** motor-handicapped woman, images, role theory, Japan, Korea